インタビュー番組に見られるボディ・マニピュレーター（Body Manipulators）の実際についての一考察

近　藤　富　英

1．はじめに

日常の言語行動においては，ことばの他に多くの非言語的要素が使用されている。非言語行動にはパラランゲージ（Paralanguage ＝類似言語記号）とカイネシックス（Kinesics ＝身振り）があり，場面・状況の中で使用しているが，言語に対する関係，コミュニケーションにおける役割や全体的な相互関係については，まだ解明されていない部分が多い。カイネシックスの研究はパラランゲージの研究よりも進展したが，本稿ではとくにカイネシックスの中のボディ・マニピュレーター（Body Manipulators）について考察を行う。ボディ・マニピュレーターというのは，ポール・エックマン（Paul Ekman）が行ったカイネシックスの分類のひとつであり，無意識的で言語とは直接関係が無いとされる動作である。エックマンはこれを Bathroom behaviors と名付けているが，「かく」，「鼻をこする」などの動作のことである。本稿ではインタビュー番組を用いて，実際の会話でどのようなものがどのような場面で使用されているかについて明らかにすることを目的とする。

2．研究の背景

言語行動を補完したり補強したりするものとしての非言語行動の研究は1950年代にその萌芽が見られるが，当初よりカイネシックスの研究がパラランゲージの研究より比較的さかんであった。本稿で参考にしたのは，ポール・エックマン（Paul Ekman）（1979）による“Four Types of Facial Expression and Body Movement”であるが，それはエックマンが，カイネシックスの全体像をその役割によって分類したからである。

エックマンはカイネシックスをその役割から以下の四つに分類している。

(1)　エンブレム（Emblems）

文化的に定められた身振りであり，ことばから切り離して使用してもその意味が通じ，意識的に使用されるもの。日本語の例としては，親指と人差し指で丸を作ってお金を表したりすることである。

(2)　ボディ・マニピュレーター（Body Manipulators）

無意識的な動作であり言語とは関係が無く，むしろ動作をしている人の心理と関わりのあるもの。例としては，頭をかいたり，ものに触ったりする動作のことである。

(3)　イラストレーター（Illustrators）

言語に付随して用いられ，話の内容や流れと密接に結びついているものであり，以下の８種類に分類される。

１）Batons：特定の語を強調する動作
２）Underliners：句・節・文を強調する動作
３）Ideographes：会話の流れや方向を示す動作
４）Kinetographs：身振りや人間以外のものの動きを説明する動作
５）Pictographs：言及しているものの形を空中に描く動作
６）Rhythmics：物事のリズムを表す動作
７）Spatials：空間の位置関係を示す動作
８）Deictics：言及されているものを指す動作

⑷　レギュレーター（Regulators）

話し手と聞き手との間の会話を続けたり調節するもので，代表的なものは「うなずき」と視線である。

３．データ・ベースについて

3.1. 使用したインタビュー番組

データとして使用したのは，2004年９月29日にテレビ朝日系で放送されたインタビュー番組の『徹子の部屋』である。今まで近藤（2008）ではパラランゲージである声門制御を，近藤（2010）ではカイネシックスのエンブレムを取り上げてきたが，それらの考察にも使用した番組である。このようにひとつの資料をいろいろな観点や角度から考察することにより，データ・ベース作成の労力の軽減を図ると同時に，重層的な分析が可能となり全体的なコミュニケーション像を捉えやすくなると考えられる。

データ・ベースの基となったこのインタビュー番組の『徹子の部屋』は，毎回，司会役の黒柳徹子がゲストをスタジオに招く正味30分の番組である。取り上げた今回のゲストはシンガー・ソングライターのタケカワユキヒデであり，トピックは主にタケカワユキヒデの長女の結婚式についてであった。

3.2. データ・ベース作成方法について

すでに近藤（2010）でも説明をしたが，インタビュー番組の選択からデータのデータ・ベース作成までの要点を簡単に記す。

⑴　資料として用いるために適当と判断した番組をビデオ録画する。本件ではタケカワユキヒデがゲストの回の『徹子の部屋』である。

⑵　ビデオタイマー（VTG-33，㈱朋栄）を使い，ダビングしながら画面に１／10秒ごとの経過時間を付ける。データ・ベースとして利用するには，開始からの時間やある特定の行動の始まりや終わり時間，持続時間などを知る必要があるからである。また特定のコミュニケーション行動を探したりそれを確認する時などにも経過時間が付けてあると作業が容易になる。

(3) オーディオ・テープに音声のみをダビングし，それを基に言葉（スピーチ）全体をデータ・シートに書き起こす。データ・シートとは本稿で考察するボディ・マニピュレーターなどのカイネシックスやパラランゲージなどの複数のコードを同時に記録するための記入用紙である。

(5) タイマー入りのビデオを見ながら，書き起こした文字に沿って，あらかじめ決められた記号を使いながら，パラランゲージとカイネシックスを同時に記録していく。これにより，これら３種類のコミュニケーション行動が，いつ，そしてどのような関係で生じているかを総合的に把握することができる。

3.3. データ・シートについて

データ・ベースを構成するデータ・シートは下記のようなものである。これに３つのコード（スピーチ，カイネシックス，パラランゲージ）を同時に記録することによってデータ・ベースとして用いることが可能となる。具体的にはＢ４の大きさの用紙を横向きに使い，一番上のＴには番組が始まってからのリアルタイムの分と秒が記入できるようになっている。その下には上下２段に分けられた部分があり，それぞれ黒柳（Ｋ）とタケカワ（Ｔ）のふたりのコミュニケーション行動が同時に記入できるようになっている。それぞれの記入部分は，ＬとＰとＫの記号が付けられているが，ここには言語（Ｌ），パラランゲージ（Ｐ），カイネシックス（Ｋ）を記入する。

T	分 秒	
K	K P L	
T	K P L	

3.4. データ・シートに使用する記号

上記で述べたように，Ｌ欄には，両者の実際の発話をそのまま記録するが，重なった発話も同時に記録できる。用いる文字はローマ字や仮名で書く方法もあるが，データ・ベースとして読みやすくするために漢字かな混じりの正書法を用いた。Ｋ欄にはボディ・マニピュレーターと思われる動作や視線，腕の動きなど，特徴的な動きがあった場合に，その動作を次に上げた記号（「カイネシックスについて」を参照）を併用しながら言葉と同時に記入した。Ｐはパラランゲージを記録する欄であるが，下の記号（パラランゲージについてを参照）を用いて言葉やさらにカイネシックスと共に記録した。使用した記号は以下の通りである。

カイネシックスについて

言葉に沿って次の記号を併用して記述した。

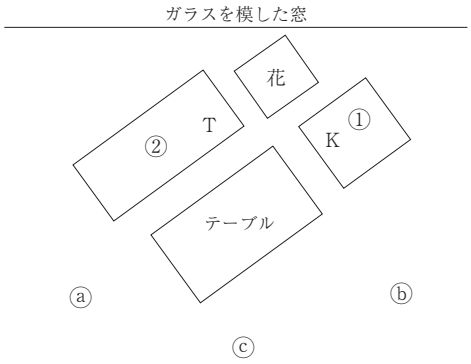
Bd：上半身
Rt：右，Lt：左
RtH：右手，LtH：左腕，BH：両手，
RtA：右腕，LtA：左腕，BA：両腕，
Hd：頭
Pst：姿勢
Bw：おじぎ
Nd：うなずき
Sm：ほほ笑み
Ey：視線

パラランゲージについて
Gc（glottis control）：声門制御
Ing（ingressive）：吸気
Hiss（hissing sound）：吸気（スー音）
Ps（pause）：ポーズ
Gi（giggling）：ギグリング
Lf（laughing）：ラッフィング
Te（tempo）：速さ
――――>：継続と終了点を示す

L，P，Kの３種類のコードを同時に記入することにより，時間の経過に合わせた全体の行動が総合的に把握することを可能にし，また二人の行動が重なった場合も同時に表すことができる。（ただし，モニター画面に一人しか映されていない場合や上半身しか映っていない場合，その人のカイネシックスは不明となり，その部分はデータ・ベース上では空欄となる。）

3.5. スタジオのセットと参加者の配置について

テレビ局のスタジオのセットが番組の収録場所であるが，ガラス窓を模した背景をバック



にして，二人のための椅子とソファーがほぼ直角に配置され，向かって右の椅子には黒柳（K）が，左側のソファーにはタケカワ（T）がそれぞれ座っている。窓に見立てたガラスには青空と緑が描かれている。椅子とソファー間のサイドテーブルには花が置かれ，タケカワと黒柳の前にはやや大型のテーブルが配され，コーヒーが置かれている。以上を図示すると，概ね前頁のような配置となる。

①には黒柳が，②にはタケカワがそれぞれ座り，ⓐ，ⓑ，ⓒの３ヵ所にテレビカメラがあるようで，ⓐが黒柳を，ⓒがタケカワをそれぞれ大映しにし，ⓑが二人を同時に撮影していると思われる。

４．結果と考察

4.1.　４種類のカイネシックスの特徴

エックマンが分類した４種類のカイネシックスの特徴を簡単にまとめると下の表のようになるであろう。ここからわかるように，今回，取り上げるボディ・マニピュレーターは，言葉とある程度結びついて使用されるが，ほとんど無意識に使われ，文化的差異も少ないと言える。無意識に使用されるということは，発話におけるその機能や役割を，その動作をしている人もほとんど自覚しておらず，むしろその人の心理と関係が深いと考えられるものである。なお，「言葉との結びつき」というのは，文脈外にあっても比較的正確にその意味が伝わり，言葉とかなりの部分で置き換えることができるかどうか，ということであり，×というのは，その度合いが高い（言葉と置き換えられる）ことを示している。

	意識の度合い	文化的差異	言葉との結びつき
エンブレム	◎	◎	×
ボディ・マニピュレーター	×	△	○
イラストレーター	○	○	◎
レギュレーター	△	△	◎

◎：大　○：中　△：小　×：必然性はほとんど無い

これらの４種類のカイネシックスが使用される身体の部位であるが，エンブレムは姿勢を含めた身体全体が可能であり，レギュレーターはあいづちや視線が主になるため，顔が中心となる。イラストレーターは手が中心となり，ボディ・マニピュレーターは手と腕が中心となりそうである。

4.2.　ボディ・マニピュレーターの機能

上述したようにボディ・マニピュレーターは，主に腕，または手が使われるが，本研究でもいくつかの例が見受けられた。種類としては，⑴手や腕が自分の身体の部分に触れたりいじったりするものと，⑵手や腕が身体以外の周囲の物に触れたりいじったりするものに分けられる。⑴は，さらに　A）手が手に触れるもの　B）手が他の身体に触れるものに分類される。　C）として腕が腕に触れる場合も考えられるが，それはつまり腕組みのことになる。

4.2.1. 手や腕が自分の身体に触れるボディ・マニピュレーター

(A) 手が手に触れたりいじったりするもの

手が手に触れると場合も以下のようなものが観察できた。

① 両手を組む

下の例は，話している最中にK（黒柳）が両手を組んだものである。同じ姿勢を取ることにより話のターンを保持しているが，熱中している気持ちが表れている。

例 1

T	分 秒	05 38　　40
K	K P L	Ey 下――――――>Ey テレビカメラ――――>Ey 合わせる――――――> BH 組む――――――――――――> 家族はみんな「ほうっ」と言った感じだったんだけど　　まず区の施設で
T	K P L	Ey 合わせる――――――――――――――>　　Ey 合わせる ――――>

② 両方の手のひらを合わせる

この例で，T（タケカワ）が娘が結婚して家族が増えたことをKに報告しているが，それを受けて，Kはターンを取りながら両方の手のひらを合わせている。ここでも，Kは家族が増えたことに驚きの声を上げて話に熱中しているようである。

例 2

T	分 秒	00 30
K	K P L	Ey 合わせる――――――>　BH 合わせる　――――>　Ey 合わせる――――――――――> そうなんですって。お嬢様が　まぁ二人目のお譲様
T	K P L	Nd 婿殿が増えました。

③ 片方の手をもう一方の手の上にのせる

この例ではTが「こわいですね。もう」と言いながら左手を右手にのせている。この動作を行いながらKにターンを譲ったと考えられるが，今までの例と同じように無意識で行われたボディ・マニピュレーターである。

例 3

T	分	03
	秒	15
K	K	Nd
	P	
	L	そう　で，その24歳が今度，学生結婚。
T	K	LtH を RtH にのせる――――> Nd
	P	
	L	こわいですね。もう　そうですね。

④　片方の手でもう一方の手でさする

この例では，Ｔは左手で右手をさすりながら，Ｋの「めずらしいですね。」という発話を聞いて，やがて自分のターンを始めている。無意識に行われたほとんど意味のない動作のようである。

例 4

T	分	03
	秒	38
K	K	Sm――――>
	P	
	L	めずらしいですね。
T	K	LfH で RtH の手首をさする――――>
	P	
	L	まぁ，８年とあと休学を３年

(B)　腕が腕に触れるもの（腕組み）

「腕が腕に触れる」というのは，すなわち腕組みのことである。癖なのか，Ｋは話している時も聞き手になっている時もしばしば腕組みをする。この例は，相手の発話を受けて，「それはすごいですね。」と感想を漏らしているときに腕を組んだ例である。偉ぶったというよりは感心したような気持ちを聞き手に抱かせるような組み方である。

例 5

T	分 秒	01 20
K	K P L	BA を組む→ あっ，それはすごいですね。
T	K P L	 末の娘は 2 歳でおばさんになりましたもの。

4.2.2. 手が身体の他の部分に触れるボディ・マニピュレーター

手が身体の他の部分に触りながら話す例もいくつか見られたが，下の例はTが右手の甲を口に当てているものである。自分の結婚した娘の年を聞かれて，即座に明言できず，「24かな？」と答えた自分が恥ずかしく「「かな」なってきちゃった」と言いながら，口に手を当てている。この動作だけで意味が通じるものではないので，エンブレムとは言えないであろう。このようにボディ・マニピュレーターは心理と関係が深いと考えられる。

例 6

T	分 秒	02 45	
K	K P L	 今，何歳？	
T	K P L	 24かな？	RtH の甲を口にあてる→ Sm→ 「かな」なってきちゃった。

次の例 7 も右手の甲を口にあてている例である。ただし，今回は「恥ずかしい」というよりは，子供の数を尋ねられて，考えているときにこの動作が表れている。このように同じ動作でも表す内容が異なる場合もある。

例 7

T	分 秒	00 40
K	K P L	 全部で子供は何人でしたっけ？
T	K P L	RtH の甲を口にあてる⟶ えーと

次の例 8 のようにその意味がよくわからないボディ・マニピュレーターもあった。ここでは，K の行った言葉（ゾロッと）を繰り返しながら右手を右耳に触れている。生理的に痒かったとは思えず，ほとんど無意味なものがあるというのもボディ・マニピュレーターの特徴であると思われる。

例 8

T	分 秒	03 10
K	K P L	 年頃の娘がゾロッと
T	K P L	RtH を右耳に触れる⟶ ゾロッといますね。

4. 2. 3. 手で物をいじっているボディ・マニピュレーター

このボディ・マニピュレーターは，身体の部分ではなくて，何か他の物体を本来の目的としてではなくて触ったりいじったりするものである。目の前に実際の物体がないと生じないが，T が自分の上着に触った例が二つあった

例 9 は，「すいません」と言いながら，両手で自分の上着の両方の裾を軽く引っ張ったものである。身なりを整えながら，かしこまった気持ちを表しているようだ。

例 9

T	分	04
	秒	32
K	K	
	P	
	L	あなたが　　あなたが
T	K	BH で服の襟をつかむ――――> Bd を前に傾ける――――>
	P	Ey 合わせる――――>
	L	えっ　　すいません。　　すいません。

次は例 9 と同じように，両手で洋服の裾を整えている例であるが，ここではTが結婚式でみんなで歌う歌を作り，それを印刷して前もって配るなど忙しかった準備の話をしている場面である。例 9 とは異なり，あまりに忙しい準備の話をしているうちにやや興奮したようである。ここでも同じ動作が異なった心理を表していると考えられる。

例10

T	分	25
	秒	18
K	K	
	P	
	L	前もって配って　　聴いて練習して下さい
T	K	BH で上着をさわる
	P	
	L	出席者全員に前もって配って　　これ　　一番大変

5．さいごに

エックマンの言うように，ボディ・マニピュレーターは，カイネシックスの中ではとくに無意識に行われる動作であるが，予想通り，手が中心となって働くカイネシックスと言える。今回わかった他の特徴としては，ターンの保持やターンの移動の際にも行われることがあるということである。また，それ自体がとくに何か具体的な意味を持つというよりは，多分に話し手の心理を反映しているものであった。さらには同じような手を用いたボディ・マニピュレーターが複数の心理を表すこともわかった。これからの研究としては，ボディ・マニピュレーターの精緻な分類や表記法の検討，他のコミュニケーション・コードとの関わり，性差や人種差などの研究が必要となるであろう。

参考文献

Ekman, Paul
1979　"Four Types of Facial expression and Body Movement," *Hidden Dimensions of Communication*, pp.175–200, Fred .C. Peng (ed), Hiroshima: Bunka Hyoron Publishing Company.

近藤富英
2006　「ノンバーバル・コミュニケーション行動としてのポーズの機能と役割への一考察」,『信州大学人文学部人文科学論集＜文化コミュニケーション学科編＞』, 第40号. pp.129–136.

近藤富英
2007　「会話におけるギグリングの機能と役割への一考察」,『信州大学人文学部人文科学論集＜文化コミュニケーション学科編＞』, 第41号. pp.127–134.

近藤富英
2010　「会話に見られるエンブレム（Emblem）の実際についての一考察,『信州大学人文学部人文科学論集＜文化コミュニケーション学科編＞』第44号）. pp.77–85.

M. Swan and B. Smith (Eds.)
1987　*Leaner English*, Cambridge University Press.

Trager, George L.
1958　"Paralanguage: A First Approximation," *Studies in Linguistics*, New York: Department of Anthropology and Linguistics, University of Buffalo. Also produced in *Language in Culture and Society: A Reader in Linguistics and Anthropology*, Dell Hymes (ed).

（2010年11月 8 日受理，11月18日掲載承認）